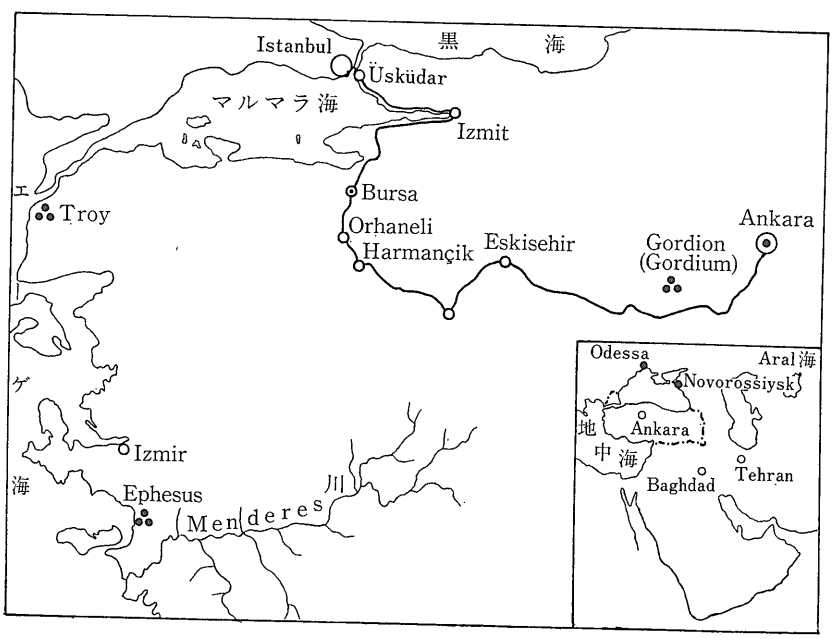
Tethys海の弧島Menderes付近の今昔

小 村 幸 二 郎（鉱床部）
Kohjiroh KOMURA

イスタンブール行の飛行機は　弱々しくなった光にオレンジ色に染まる大砂漠の上空を　快適に西へ向かって飛び続けている．　空席はなく　隣りの席にはトルコの美しいお嬢さんがいる．　2時間半ばかりの短かい旅ながら　美しいお嬢さんと話し合えるのは気がまぎれて一人旅には楽しいものだ．　イスタンブール育ちのそのお嬢さんは　私がこれから訪れようとするブルサへはまだ行ったことがないらしい．　「ブルサはビチユニアのプルシアス王によって建設され　1326年から1426年まではオスマントルコ帝国の首都だった…」「貴方はトルコ人の私よりもトルコのことをよくご存知ですね…」といった楽しい語らいは　言葉を交しはじめて間もなく囲りの荒々しい声で幕切れとなった．　その荒々しい声の主は　20人ばかりの男の団体客の仲間であった．　かなり古びた服を着たその男達は　1人残らず　太い紐できつく縛ったビニール製のトランクを大切そうに持っている．　食事を前にして言い争うこともなかろうにと思いながら前方を見ると　大柄なスチュワーデスに　数人の男達が高ぶった様子で何かを言っている．　どうやらその原因は配りはじめた食事の肉にあるらしい．　間もなくやってきたそのスチュワーデスは「鶏肉を希望されたのでそれを運んだのに　どうしても納得してもらえない」と　こぼしていた．　一目見れば鶏肉だと判るはずなのに　一体どうしたことだろう．　もしかすると　この人達は　このように料理された鶏肉をはじめて見たのかもしれない．　何とも人騒がせな人達である．

食事も終り　隣のお嬢さんとの楽しい会話に戻れると思ったのも束の間　入国カードが配られて　又も一騒ぎ起こった．　そして今度は　当方と隣のお嬢さんが　それをもろにかぶることになった．　強い訛りの英語で話していた男達なのに　書く方はどうやら駄目らしい．結局2人で手分けして　男達の入国カードを書く破目になった．　多勢の客の中に　少くとも2人の善人がいることは確かである．

Istanbul 市街は　既に闇に閉ざされている．　慌ただしく Ankara 行の飛行機に乗り換えた．　この飛行機は最終便なのか　やはり満席である．　妙に肌寒い高



原の首都 Ankara　ここがこの旅の出発点である.

Ankara から Harmançik へ

一夜明けて　Ankara は快晴であった.　Atatürk Bulvari に面する Büyük ホテルを出て　国道68号線を西へ向う.　広大な敷地に数多く建つ M. T. A. には日本から派遣された専門家達が勤務しているはずだが　立寄って話すゆとりはない.　以前に訪れた時　豪華な食事を御馳走して下さった総裁の　Alpan 博士も既に退職されていることを知っているせいか　心なし淋しくもある.　遠くには中近東工科大学の建物が見える.　久留島秀三郎氏や兼子勝氏をよく知っておられる　Tokai 教授は　元気にしておられるだろうか.　温厚な人柄を偲ぶうち　M. T. A. の建物も中近東工科大学の建物も視界から消えた.

Ankara を出て100kmばかりの所に Gordion という所がある.　この国道傍には小さな案内板が建っているだけでつい見落しがちだが　トルコの歴史を知る上では見落せない所の一つである.

小高い丘が連なる　Gordion 一帯には　古代の遺跡が続いている.　アラビアの地理学者がカラート・アル・サラーシル（鎖の城塞）と名付けたアンカラは　紀元前8世紀頃　フリージア人によって建設されて以来栄えたといわれている.　この遺跡は　そのフリージア人が建設した首都の名残りである.　広大な平地とゆるやかにうねる丘の連なり　今は数えるほどの農家が建っているにすぎないが　当時は今の姿からは想像もできないほど栄えていたのであろう.　当時の王はすべてミダス王と名乗っていたということだが　「ミダス王が触った物はすべて金に変った」というギリシャ神話が伝わっていることから推察しても　この地が豊かな富に恵まれ　そして繁栄していたことは間違いなさそうである.　発掘された部分の土壌の中に何層にも含まれている白骨片はどのような動物の骨かよくは判らないが　当時　食料とされた小動物の骨片であることは間違いなさそうである.

写真1　Ankara の南方60km付近の風景
広々とした麦畠と植生の乏しい丘陵地形はアナトリア高原にみられる典型的な風景の一つである
Eskisehir 方面へ向う列車は貨・客混合で　様々な車輛が目をひく

おびただしい素焼の器の破片には　様々の模様がくっきりと刻みこまれ　この国の古い文化の素晴らしさを物語っている.　以前にここを訪れた時　見張りの男が何処からともなく姿を現わした.　トルコ語を十分に理解することができれば　この遺跡についての様々な話を聞き出せるかもしれないのだが　残念ながらそれだけの語学力は全くない.

遺跡の傍に　高さ20～30mの富士山とそっくりの形をした丘がある.　ここは紀元前650年頃に建設された王の墓である.　懐中電燈を頼りに入ると　丘の丁度中央部に墓室がある.　はじめてこの墓所に入った時　私はまず室の壁にある巨木に目を奪われた.　樹令750年と

写真2　Gordion 遺跡発掘現場の一部
ツボの破片などが多数散在しているがこれらはすべて持出し禁止である

写真3　Gordion 遺跡に隣接する王墓
頂上に立っているのは測量基点

いわれるこの巨木は　一体どこから運ばれてきたのだろうか．　少なくとも現在のこの地にも　また Ankara 付近にも　これほど大きな野生の木はみられない．　思ったより狭い室に似つかわしくないほど大きな木に　王の権力の偉大さや王を慕う人々の心情が偲ばれる．　墓所の裏には荒れ果てた平地が打続いている．　何の変哲もないその荒地のほんの一部に　土を掘り越した所がある．　ここを訪れる人のほとんどは　恐らくこれに気がつかないのではなかろうか．　だがこの場所こそ　紀元前450年頃のエーゲ海に臨む Izmir からイラクの首都 Baghdad まで続く「王者の道（太陽の道）」の発掘現場である．　そこには　幅8mばかりの「王者の道」がむき出しになっている．　道の中央部が少々高くなっているのは排水のためだろう．　「強者共が夢の跡」という言葉が彷彿する Gordion のたたずまいに想を馳せるうち　車は西へ向ってひた走った．

行き交う自動車も数少ない国道を走り　午後2時頃 Eskisehir に到着した．　アナトリア高原に発する Sakarya 川の一支流 Porsuk 川沿岸地帯の肥沃な平野の一角を占めるこの町は　エーゲ海やマルマラ海の沿岸地域からアナトリア地帯へ通ずる多くの道路が集まる交通の要衝であり　周辺に広がる平野がもたらす富と相俟って　古くから栄えた町であるが　19世紀の末期に Istanbul と Ankara を連絡する鉄道幹線がここを通るに及んで以後　町は日増しに活気づき　そして人口は急増し　今やトルコ第6の都会に変貌している．

町の中心にあるホテルの食堂には　2組の先客がいた．広々とした食堂に客が少ないのは　昼食時間をとっくにすぎているからだろう．　パンとシシキャバブーとジュースの昼食は呆気なく終った．　陽は高く Ankara よりは幾分暑くはあるが　空気が乾燥しているせいか中々快適である．　長距離バスのターミナルには多勢の客がいる．　ターミナルの向い側の大きな店に入ってみた．一般の土産品店に見えた店は　トルコの特産品の一つとして広く知られているメルシャム（海泡石）パイプを主として販売している店であった．　パイプ集めを趣味の一つとしていることもあって興味をそそられはするがこれはと思うパイプはかなり値段が張る．　一通り見せてもらいはしたものの　結局は買わなかった．　そういえば Eskisehir は　トルコで有名な海泡石の産地である．　ここでメルシャム・パイプについて一くさり述べると次のようになる．　パイプといっても　その材料は立派な鉱物資源である．

海泡石は英語名を Sepiolite といい　メルシャムというのはドイツ語名 Meerschaum で　その化学式は$Mg_5SiO_{20}(OH)_2 \cdot 8H_2O$ で表わされる．　比重は2　硬度2～2.5で　斜方晶系に属する繊維状集合体をなし　本来は蛇紋岩中に変質物として産出するが　パイプや装身具として加工されているものは　主として沖積層中に礫状に含有されているものである．　軽くて加工しやすい利点をもっていることから珍重されるようになったらしいが　白色や淡いクリーム色のパイプは　丁寧に使わないと比較的短期間で値うちが下る．　その原因の一つは手垢がつくとしみついてしまうことである．　また　余り良質でないものは　割れるおそれがある．　もし上等のパイプを手に入れたら　使用する以前に　やわらかくなめした鹿皮か羊皮　または　ラシャのようなものですっぽりと包んだまま1年間ぐらいは使う方がよい．　このような状態で使用したパイプは　それが白色または淡いクリーム色のものであれば　見事な琥珀色に染まりまた　カバーを取除いて使用しても手垢がつく心配も殆んどない．　くだらぬパイプの話といえばそれまでだが全く再生することが出来ない鉱物資源を大切に使うという意味では　メルシャム・パイプも他の鉱物資源とあまり変らない．

午彼6時　目的の村についた．　Ankara を出発しておよそ8時間半の自動車の旅はひとまず終った．　Harmançik の村は　深い緑の中に静かな夕暮れを迎えようとしている．　村の中心に建つ回教寺院では　もう夕方の礼拝は終ったのだろうか．　「アラー　アクバル　ラー　インラ　イラハ　インラ　アラー……」の声も聞かず夜を迎えた．　午後9時　夕食が始まった．　テーブルには　ラクと呼ばれる飲物がある．　この飲物は　ナツメヤシの実などを原料とした　いわゆる中近東特産の焼酎で　ラクとかアラクとかアラキとか呼ばれるものである．　北原白秋が詩人として世に認められるきっかけとなった処女詩集「邪宗門」の中の「吾は見たり末世の邪宗……」で始まる「邪宗門秘曲」の一節に「はたアラキ……」という句があるが　このアラキは恐らく中近東のアラキを意味しているのであろう．　それにしても白秋はこのアラキのことをどのようにして知ったのだろう　そして　この強烈な詩からは想像もできないほど情緒豊かな詩を作り続けるようになった心情の変化は何に根ざしているのだろう．

Tethys 海の弧島 Menderes

Harmançik から Orhaneli に至る地域は　トルコの代表的なクロム鉱床分布地域の一つとして　古くから知られている．　深い緑を縫う道を Orhaneli へ向う途中に　クロム鉱山がある．　働く人は見当らないが　選鉱

場はもう動いているらしい．　この鉱山で採掘されているクロム鉱床の露頭の幅は数10cm だったそうだが　この露頭が大規模な鉱床のほんの一部であることを看破した技術者と　その技術者を信じ切って探鉱・開発に着手したであろう鉱業権者の生き方には　巨大化しすぎた組織の中では経験し難い羨望さえ感じられる．　つい見落しがちなほど小さな露頭が巨大な鉱床に移り変ってゆくのも自然現象　そして巨大な露頭が地表から浅い所で完全に消滅してしまうのも自然現象である．　恐らく欲が深くて上べを飾りたがる人は　削剝作用の性質やその程度を考えもせず　後者にとびつくことだろう．　見てくれの立派な物や人が真に立派かどうかは　上べを見ただけでは判るものではない．　真実に満ちた自然界を見極めるには邪念があってはならない．

森が尽き　広々とした向日葵の畠が続く．　そして間もなく広大な畠に出た．　道傍に点々と露出していた変成岩や超塩基性岩に代わって　花崗岩が露出している．道傍の一軒家の近くで　花崗岩の割目から清水が湧き出ていた．　甘味のあるこの水は　この付近では最高に美味いらしい．　ゆるやかにうねる麦畠に人影が見当たらないのは　もう刈り入れが終ったからだろうか．　ヘヤーピンカーブを幾度か回って　車は Orhaneli に着いた．小さな町だが　Harmançik よりは家が密集している．町の中央部に建つ回教寺院のミナレット（尖塔）　小じんまりとしたホテル　白壁と暗褐色のふちどりの美しい木造家屋　そして石畳の道　ゆるやかにうねる丘とそそり立つポプラ　正に平和な田舎町といった風情ではあるが　道傍の一角にはジャンダルマ（一般には民間防衛隊と呼ばれている）の詰所がある．　裏手の小高い丘に小学校らしい建物があった．　美しい風景に包まれたこの学校で　子供達はどのような将来像を胸に画いて学んでいるのだろうか．

写真4　Orhaneli 中心部付近の風景
山と丘と耕地を前に　ゆるやかな丘の斜面にあるこの町は　モスクを中心にひらけ　美しいたたずまいを見せる静かな町である

家並はすぐにと切れた．　道は石畳から砂利道に変わった．　本道からそれて　車は山道を上ってゆく．　見渡す限り一面の畠には　人の姿は全くない．　古めかしいミナレットと一握りの家が寄り添うように建っている部落を過ぎると　道は益々嶮しくなった．　そして坂を上りつめて山の頂上へ出た．　ここはトルコの中央部を東西方向に走るアナトリア高原の北西端である．　延々と続く峰を刻む谷の上方には積雪が残っている．　今立っている山頂付近も　冬には1m余りの積雪におおわれるということだが　労働者は遥か下方の部落からこの山頂まで　1時間以上もかかって歩いて来るということだ．深い雪におおわれた尾根道を　吹きすさぶ風になぶられての通勤はさぞかし辛いことだろう．　あまりにも恵まれた環境に生きる人達には容易に真似のできることではなさそうである．

尾根から少し下った急斜面に　典型的な縞状構造を示すクロム鉱床の一部が露出している．　反対側の別の鉱床は塊状の鉱石からなる鉱床である．　山道の片隅に幅3 cm ばかりの露頭があった．　この露頭は　深部まで連続しているのか　連続しているとしたらどのような形状をなしているのだろうか．　多様な性状で地表に露出するクロム鉱床を見つめながら　地下に潜む部分に思いを巡らせてみた．　しかし　象の尻尾にも相当しない部分を見ただけで全体を想い浮べるには　まだまだ知識も経験も乏しい．　エーゲ海地域では　ギリシャ　トルコ　シリア　キプロスなどにクロム鉱床がどのような形状や規模・品位で分布しているかを知ってはいるつもりだが　それはあくまでも総括的　あるいは特定地域の鉱床とその地質的環境に限った知識であり　とても個々の鉱床に及ぶものではない．　そうした意味では　様々な性状を示す露頭や　ほんの一すじの取るに足りないような露頭を見る機会を得たことは誠に有難い．

ヨーグルトに焼肉そしてパンの昼食を終え　山頂付近を歩き回っているうちに　夕刻になった．　弱々しい光に照らされた畠は黄金色に染まり　山の緑に映えて美しい．　Orhaneli のホテルの前では　孫を連れたお婆さんが柔和な笑顔で迎えてくれた．　「すぐ近くにトルコ風呂がありますが　いかがですか」と誘われたが　「雲つくような大男にアンマされては　このキャシャな身体がばらばらになりかねないから」と断った．　だが立派な口髭を生やしているに違いない三助に身体を洗ってもらうのも　王侯貴族の生活の一端を経験するという意味では　捨て難い気もする．

遠い昔　東の方へ拡がる扇形をした Tethys 海と呼ばれる大海があった．この海の西の端付近には Rhodope 島 Menderes 島 Lut 島などの弧島が東西方向に点在し　南方では　現在のアラビア半島やインドやマダガスカル島が Pangaea（現在の大陸は古生代末期ごろまでは一かたまりの大陸をなしていたと想定されている仮想の大陸（の一部を形成していた．　やがてプレートの動きとともに Pangaea は分裂の兆しを見せはじめた．　プレートの動きは時の流れとともに活潑となり　三畳紀に入ると Pangaea は Gondowana 大陸と化し　インドとマダガスカル島は胎動を始めた．　ジュラ紀に入ってインドとマダガスカル島は　あたかもシャム双生児のような形をなして　Gondowana 大陸から分裂し　弧島の南側には東西方向に伸びたレンズ状の島からなる島弧が誕生した．　この島弧は　やがて Taurus 山脈や Zagros 山脈に成長してゆく．　白亜紀に入り　最西端に位置していた Rhodope 島は北方の　Eurasia 大陸の一部と化し　弧島群の北側には Pontid 山脈や Elbrut 山脈に成長してゆく島弧が誕生し　Tethys 海は狭まり　西方には地中海に育ってゆく湖が誕生した．　第三紀の半ば頃には　インドはマダガスカル島と完全に分離して北東方への漂流に旅立ち　Menderes 島は北側の大陸の一部と化し　2列の島弧は急速に成長していった．　そして遂に　Tethys 海地帯は現在の姿に変ってしまったわけであるが　過去の変遷と現在みられる鉱床の分布とを重ねてみつめてみると　鉱床の圧倒的多数がかつて Tethys 海に浮ぶ弧島であった陸塊と陸塊の間に分布していることに気がつく．　地球の変貌と鉱床の生成・分布とが密接に関係していることを示す例として　トルコからイランに至る地帯は極めて興味深い．　そして　今足跡を残している Harmançik から Orhaneli を含む地域は　Pangaea が分裂をはじめて間もない　Tethys 海に弧島として浮んでいた Menderes 島の一部である．

人口およそ2800人の Orhaneli の朝は静かであった．ゆるやかな坂道を登って　小学校に行ってみた．　早朝なので人影は全くない．　平家建の木造校舎には　やわらかな光が注いでいた．　物音一つしない丘の上　ゆるやかな丘のうねりと深い緑　あくまでも澄みきった空の下で　今日も子供達は元気に学ぶことだろう．　いつまで見つめていても見飽きない小さな学校の美しさに Orhaneli の人々の優しさが感じられる心地良い朝である．

すさまじいばかりの砂埃りを舞上げて走る道には対向車もない．　40km ばかり走った所で車は停った．　道傍に立派な水道がある．　一軒の家もないこのような場所に水道があるのは不思議に思えるが　Orhaneli から

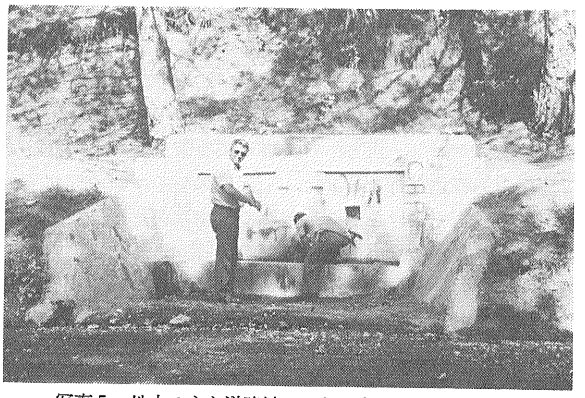


写真5　地方の主な道路沿いにある水道
このような水道は或程度の間隔で設置されているらしい　恐らく自動車が常用される以前から人と家畜のために設けられたものだろう

山頂へ向う折にもこのような水道を見かけた．　運転手の話では　主な街道筋には或程度の間隔でこのような水道が設けてあるということだ．　旅人の喉の渇きを潤ほす水と受取って　一口飲んでみた．　それは冷んやりとした甘味のある水だった．

峠を越えて曲りくねった道を下った車は　再び砂利道を上りはじめた．　山腹を削りとって造った新しい道は狭く　谷側の路肩はいまにも崩れ落ちそうだというのにガードレールはない．　この山道を通いなれているらしい運転手は　時折　路肩ぎりぎりまで車を寄せたり脇見をしながらハンドルをさばいているが　その都度　当方の背筋には悪寒が走り　足は硬直する．　深い谷の底では　ダムの新設工事でも行なわれているのか　大型のショベルカーが数台うなり声をあげている．　山肌にへばりつくように建っている一かたまりの家は近い将来満々と水を湛えたダムの静かな水面に　その影を落すことだろう．　小川を渡った所でアナトリア高原は尽きた．林を通り抜けると突然視界がひらけ　広大な平地の南端にある Bursa の市街が目に入った．

海抜2493m の Ulu 山の北麓に位置する Bursa を一度訪れたいという願望は　20年以上も前に芽生えていた．その願望が実現した今　胸は Bursa を目前にして早鐘を打つように高ぶっている．　イエシル・ブルサ（緑のブルサ）の名に背かず　Bursa の市街は美しい緑に包まれていた．　冬季には深い積雪におおわれる Ulu 山を背にし　マルマラ海との間に広くそして肥沃な平野をのぞむ Bursa は　紀元前3世紀頃 Bithynia の Plusias 王によって建設され　かつては Plusa と呼ばれていた栄光の都であった．

オスマン帝国の古都に想う

ソ連の Kazakhstan と Uzbekistan との境界付近に Aral 海と呼ばれる大きな湖がある．この湖の東方に拡がる大草原で半遊牧民として生活を営んでいたグズ・トルコ族の一派は 西方への侵略を図る蒙古軍に追われて 西方への逃避行を続けた．族長スレイマン・シヤーは 逃避行を続けながらも望郷の念止みがたく 故郷への道を辿りはしたものの その途中 Euphrates 川で溺死するという悲運に見舞われた．スレイマン・シヤーの息子エルトウルルは 一族と共に再び西への道を目指し 途中の部族と血縁関係を深めながら 次第に勢力の拡大を図っていった．エルトウルルの死によって1288年に族長に選ばれた息子のオスマン・ベイは 権勢を誇っていたビザンテイン帝国を攻略し かつて父エルトウルルに遊牧の土地を興えたセルジューク・スルタンの衰微につけこんで 1299年 独立するに至り ここにオスマン（オットマン）帝国が誕生した．そして Brusa はその最初の首都として 以来半世紀以上にわたる繁栄を迎えることになる．オスマン帝国の創設は トルコの政情に一時代の指向性を決定づけたという点で重要な意義をもつが 一方 オスマン・ベイが族長に選ばれた時既に 一族と共にイスラム教に改宗していたこともトルコのその後の精神的指向性に強い影響を与えたという点で注目される．

1326年にオスマン・ベイは Bursa で没し オルハン・ベイの時代に入って オスマン帝国は 内政・経済の充実を図る一方 ビザンテイン帝国の攻略とヨーロッパへの進出を図った．時は流れ オスマン帝国は 十字軍に大勝して広くその威信を誇示し コンスタンティノーブル（現在のイスタンブール）攻略の宿願を達成し アジア的性格を強く保ちながらもヨーロッパの国家群においても一きわ強大さを誇り 英君スレイマン1世の時代にはカスピ海からオーストリアそしてアフリカ北部を領有する大帝国となった．しかし 余りにも権勢を誇示するオスマン帝国に対する被征服民族の反抗や特権階級の奢侈と重税に根ざす内紛が続出し ようやく衰退の兆しが見えた．坂道を一気に転がり落ちるようにオスマン帝国は滅亡への道をひた走るかと見えた19世紀の初頭からおよそ60年にわたって 3人の皇帝による政治・経済改革の促進によって 民衆の多くは平常心を取戻し国内は安定化へ向った．この大改革はトルコ史上不滅の快挙として高く評価されたものの 一度転落への道へ足を踏み入れたものの宿命ともいうべきか 外交政策の失敗 外国との戦い そして政治的派閥の競合など 再び内憂外患の時を迎え 第1次世界大戦においてオーストラリアとドイツ側に同調したのを契機として その勢力は急速に衰えていった．フランスとイギリスの援助を受けて猛攻を続けるギリシャ軍の前に エーゲ海沿岸地帯の要衝は 次々に陥落していった．しかし いつの時代にも 祖国の窮状打開のために身を挺する英雄が居る．オスマン帝国の完全な解体を意味するセーブル条約が連合軍との間に締結された1920年8月を迎えてムスタフア・ケマル・パシヤの率いる軍勢は独立戦争の火ぶたを切り ギリシア軍に大勝して その占領地を奪還することに成功した．そして2年後 古くから続いたスルタン制は廃止され メフメット6世は亡命へ旅立ち 623年にわたるオスマン帝国の治世は終りを告げた．そしてアタチユルク（建国の父）と呼ばれたムスタフア・ケマル・パシヤの統率の下に トルコは政治・経済・宗教・文化などの改革を断行し 近代国家としての道を力強く歩むことになる．

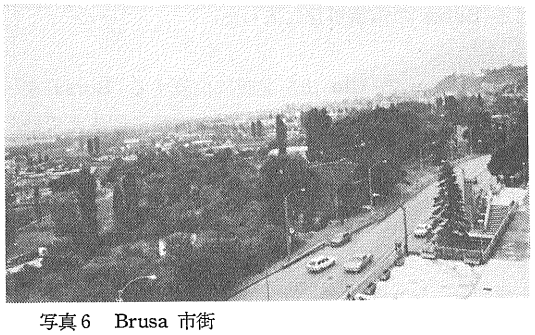


写真6 Brusa 市街
オスマン帝国の首都として栄えた Brusa は豊かな緑に包まれた美しい町である 温泉保養地としても名高く オスマン帝国時代の遺跡とともに多くの遊客を誘う魅力的な町である

ビザンテイン帝国の人々も療養を目的として訪れた Brusa は 今もトルコ有数の温泉保養地として また絹織物や農作物の豊かな産地として知られ そこにはオスマン帝国のスルタンが永遠の眠りにつく墓所がある．高い山を背にした美しい緑の町 Bursa には しかしオスマン帝国発祥の激しさを伝えるものは数少なく 明るい陽射しに映える美しい緑の中に生きる人々の静かな営みが満ちている．市街の高まった一角に近代的なホテルが建っている．そしてその建物と並んで 円蓋をもつ石造りのどっしりした建物がある．古色蒼然としたその建物は風呂であった．広々としたマスラハ（広間）と風呂場には浴客はいない．建造当時からほとんど変わっていないということだが 遠い昔から様々の人がこの風呂を利用したことだろう．広々とした風呂に浸り荒々しいマッサージの後 浴客はマスラハで世間話に興

じたことだろう．　妖精は浴場を好むと言い伝えられてきたらしいが　どのような妖精が浴場を好んだかは知るよしもない．

建ち並ぶ店のショーウインドーに　鮮やかな赤に染まった毛織物が飾ってある．　昔トルコでは茜の根に含まれているアリザリンを染料として　羊毛や木綿を赤に染めたといわれているが　今もこのような染色方法は伝えられているのだろうか．　本物のトルコ赤で染色された織物や特産の絹織物を見る暇もなく　山腹に建つモスクの素晴らしさと深い緑に包まれた町のたたずまいにオスマン帝国の首都として栄えた当時の様相に想いを馳せながらBursa を後にした．

国道40号線にも33号線にも　車は多くない．　マルマラ海の東岸近くを走る道は平坦である．　右手に遠くアナトリア高原の山々がかすみ　左手に時折見えるマルマラ海の青さを背にして建つ白い瀟酒な建物は別荘だろうか．　Bursa を出発してからおよそ140km　車はマルマラ海の東の端に面する Izmit の市街で国道１号線に入った．　Ankara Istanbul　そして Brusa を経てエーゲ海地域へ向う道路の分岐点に当る Izmit は　Brusaよりは活気がある．　国道沿いに建設中の同じような高層ビルはおそらく住宅だろう．　Izmit 湾のほぼ中央部に停泊している鋼灰色の船は軍艦らしい．

Izmit の市街を一気に通り抜けて　車は国道１号線を西へ向った．　メーターは時速 100 kmをはるかに越えている．「Istanbul から Ankara まで　一般の乗用車よりも２時間ばかり早く行ったことがある」と語る若い運転手は　きっとかなりのスピード狂なのだろう．　一歩間違えば「死出の旅」　人と車を愛する人は安全運転を心がけることをこの若者は知っているのだろうか．しかし　スピード狂は　どうやら　この若者だけではないらしい．　Brusa から Izmit までの道路とは違って一きわ車の多い国道を　様々の車が　抜きつ抜かれつを繰り返しながら走ってゆく．　トルコでは自動車事故が多いと聞いたことがあるが　このような光景を見ていると　自動車事故の発生しない方がむしろ不思議だ．

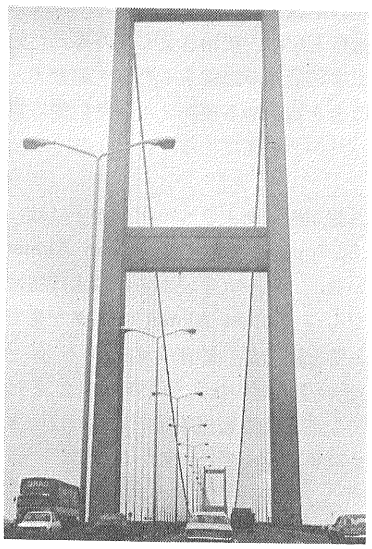


写真７
アジアとヨーロッパをつなぐ Bosporus 橋
橋の下をマルマラ海と黒海をむすぶ Bosporus 海峡が通っている　この橋の建設には日本の技術も提供された

家並がきれて間もなく　何となく囲りの風景がかすんで見えるようになった．　海岸沿いの道路とはいえ　快晴の空の下でまさか気流や湿度の違いなどが原因ではあるまいと思う間もなく　大なきカーブで曲ったとたんに前方の丘の上に白煙を吐く巨大な煙突と大きな建物が見えた．　それは　何度か訪れたトルコで　はじめて見るセメント工場であった．　人家もなく　農耕地らしいものもなく　そして振動も騒音も全く感じられながら　やはりこの排煙に嫌悪感をもつ人達がいるらしい．

Izmit から 95km　オスマン帝国の古都に未練を残した一日の旅は終り　Istanbul に到着した．　ホテルの玄関には　美事なカイゼル髭を生やした顔見知りの大男が立っていた．　身の丈２mに近い大男に似合わず　きわめて愛想の良いこの大男は　このホテルのドアーマンである．

一風呂浴びて　既にとっぷりと暮れた Istanbul の町を　ガラタ橋の方へ向って歩きはじめた．　通りに面した目的の店には　客は居ない．　40をとっくに過ぎているらしいボーイは一瞬驚き　そしてにこやかに迎えてくれた．　「ミックス・キヤバブーにサラダにヨーグルトにジュースにパンですね」と言い残して　そのボーイはさっさと調理場へ入って行った．　店の構えは小さいが清潔でシシキヤバブーの味が素晴らしいこの店で食事するのはもう何度目だろうか．　ボーイも注文の品を聞かなくてもよいほど　当方の顔と好みを覚えているらしい．

広い歩道を行く人は少ない．　通りに面して大きなガラスを張りめぐらせた喫茶店には　若者達がひしめくように入っている．　タクシム広場の夜店もそろそろ店じまいをはじめたらしく　心なしか食事に出かける時よりも人通りが少ないようだ．　妙に謎めいた Istanbul の夜はこれからはじまるのだろうが　一人旅の身は一日の行動のメモを書き終えて　ホテルのベッドに横たわるしかない．　ボスボラス海峡に船の灯は見えず　Üsküdar の灯は煌々と光っている．

Istanbul 点描

Odessa へ行くのか Novorossiysk へ向うのか　純白

の客船がマルマラ海の静かな水面を割って　音もなく Bosporus 海峡へ入ってゆく．　窓越しに見る雲一つない大空の下　右手の丘の上にはトプカピ宮殿　左手にはマルマラ海を隔てて　アジア最西端に位置する Üsküdar の町が見える．　マルマラ海に浮ぶ伝説の小島も既に目ざめてはいるのだろうが　その姿は見えない．　歌で知られる Üsküdar は　古くは　Chrysopolis と呼ばれ　アジアへの起点として栄えた町だが　今はもう当時の面影はないのかもしれない．　アジア最西端の町　そしてクリミア戦争当時　ナイチンゲールが活躍した野戦病院の町 Üsküdar は　妙にアジアの人を魅きつける何かを秘めている．　一度訪れてみたい町ではあるが　物見遊山の旅で来たわけではない今　そこを訪れるわけにはいかない．

出発前の慌ただしさの中で　昨夜通った道をガラタ橋の方へ向った．　金角湾に架かるガラタ橋への坂の上に建つ目的のホテルはすぐに見つかった．　15年ほど前はじめて Istanbul を訪れた折　数日を過したそのホテルは　外装もロビーも当時と全く変っていなかった．ヒルトンホテルが建って間もない当時の Istanbul では中々立派に見えたホテルだが　やはり時の流れはいつの間にかしみつくものらしい．　きわめて親切だったエレベーター係とコック長のことを聞いてみたが　従業員の多くが変ってしまったらしく　遂に２人に逢うことはできなかった．

何故か重い足どりで坂道を下った．　ガラタ橋をはじめて渡る折　２人の老人に「ノギとトウゴウを知ってるか？」と聞かれたことがあったが　今は立話などとてもできないほど　ガラタ橋は車と人で混みあっている．橋を渡った所に　オスマン帝国に最高の繁栄をもたらしたスレイマン皇帝が建立した Suleymanie モスクがある．　このモスクの東側にはスレイマン皇帝と皇妃の廟があるが　地下に眠るこの名君は　オスマン帝国の将来像をどのように画いていたのだろうか．　花は満開を絶頂期としてその美しさを失ない　華麗な色彩を身につけなければ生きていけない鳥は　既に鳥としての本来の姿を失っているという．　人間もそして人間社会にもこれと似通ったことがあるのではなかろうか．　余りにも急速に変貌する社会にとまどい　余りにも見苦しい欲望とそれに根ざす横暴さがまかり通る現代の世相を見る時　人間らしさが失なわれた人間社会の転落の姿を見せられているように思えてならない．　そして純な心で人間らしく生きようとする人を弱者とさげすみ　あるいは　そうした人々を意識的に置きざりにしようとする風潮があるとすれば　こんな悲しいことはない．　スレイマン皇帝の人柄については知るよしもない．　しかし今もこの廟にぬかずく多くの人が後を絶たない状景を見つめていると　スレイマン皇帝と妃の　統治者としての秀れた知識と勇気と　そして帝国最大の繁栄をもたらす原動力となった民衆に敬愛の念を抱かせる要因となった仁愛に満ちた人柄ではなかったかと思えてくる．

写真８　マルマラ海から　Bosporus 海峡へ向う客船
手前は Istanbul 対岸の町は Üsküdar

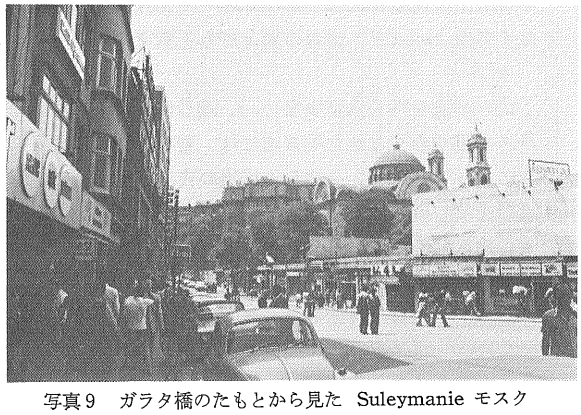


写真９　ガラタ橋のたもとから見た　Suleymanie モスク
教会としては世界最大の規模を誇っていた建造当時の面影を今も残している　２本の塔はモスク（回教寺院）になってから建造された

小さな商店が建ち並ぶ坂道を上りつめた丘の上には Topkapi 宮殿と St. Sophia モスクと Sultan Ahmet モスクトが建っている．　ヨーロッパからの旅人は特に６本のミナレットをもつ Sultan Ahmet モスクを見て東洋の神秘にうたれると聞くが　紺青のマルマラ海と Üsküdar をのぞむ丘の上に建つ壮大なこのモスクをはじめとする巨大なそして優美な歴史的建物を見れば　アジアの人といえども深い感銘を受けることだろう．

巨大な大砲（トプカプ）があったことから Topkapi と呼ばれるようになったこの宮殿は　ギリシャ時代のアク

ロポリス（acropolis）（古代ギリシヤの都市国家は市街地とその周辺の田園地帯とからなり　市街地のほぼ中必部かその背後には　防備の拠点となる丘があった．　この丘は polis と呼ばれ　「高い」という意味の across という言葉が加わって acropolis と呼ばれるようになった）　ビザンテイン帝国時代の宮殿の名残りである．　広大な建物にはいささか驚ろかされるが　1863年の大火で焼ける以前は　どのように壮観だったことだろう．　様々な宝石をちりばめた刀剣や玉座や衣類や家具　色とりどりの無数の宝石　巨大なエメラルドの原石　そして今の日本では滅多にお目にかかれそうにない古い伊万里焼の大きな皿や古代中国の陶器類　どれを見ても庶民に溜息をつかせるようなものばかりである．　だが　とりたてて立派でもない器の中に入れてある無数の大きなダイヤモンドを見ていると　ふと「本物かな」と疑いたくなってくる．　人間の心理というものは不思議なものだが　これも豊かでない人間の性の一つだろう．　品の良い初老の夫婦がすぐ前を歩いている．　数々の宝石を見ているうちは２人共唯々驚いている風であったが　外へ出て間もなく御主人の顔は少々きびしくなったように見える．　２人の話し声はとぎれとぎれにしか聞こえないが　どうやら奥さんは宝石の類を買ってくれない御主人に愚知をこぼしているらしい．にこやかだった２人の変りようを見て　ふと「もしも２人連れでここを訪れる機会があったとしても　宝石陳列場の見学だけは避けた方がよさそうだ」と　思いはしたものの　宝石を買ってくれる程の甲斐性がないことはとっくにお見通しだから　これはいらぬ心配かもしれない．

Topkapi 宮殿の近くに建つ St. Sophia モスクは　多くのモスクとは違った独特の形をしているが　このことに気付く人は意外に少ないのではなかろうか．　紀元325年にこの地を都としたコンスタンチヌス大帝は　都の中心に巨大な聖堂を建てた．　その聖堂は　およそ500年の後に大規模に改築され　世界最大のキリスト教聖堂として　またビザンテイン建築の最高傑作として世人の讃辞を浴びた．　しかし偶像拒否を生き方の一つとするイスラーム教の時代に入ってモスクとなり　ミナレットが建立され　内部にあったキリストや聖人達のモザイク像は剝ぎ取られた．　直径31m　高さ54mのドームに面した２階のごく一部にかすかに残る聖人像を見つめていると　改築された当時の壮麗さと歴史の重みと宗教のはかり知れない強大さが　ひしひしと伝わってくる．

冷んやりとした St. Sophia モスクの前に Sultan Ahmet モスクが建っている．　あくまでも美しいエーゲ海から Dardanelles 海峡を通り　静かなマルマラ海の船旅を終えようとする人々にとって　左手の丘の上に建つこのモスクは　おそらく　驚嘆に値するものだろう．

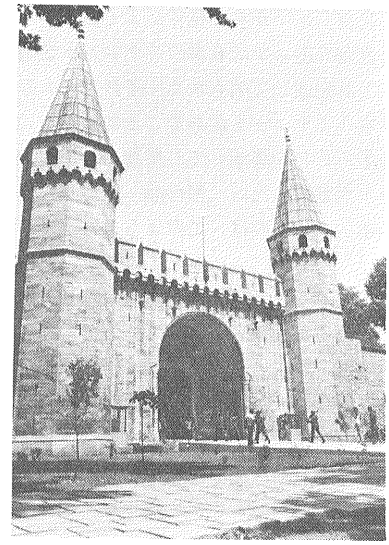


写真10　トプカピ宮殿の正面入口
内部には古くからの財宝の展示室やハーレムの跡がある

６本のミナレットと多くのドーム状の屋根をもつこのモスクは　戦乱に明け暮れた戦国の世を平定した徳川家康が永遠の眠りについた年　1616年に建設されたものである．　草花模様の美しい青いタイルで内壁をはってあることから「ブルー・モスク」とも呼ばれるこのモスクの内部には　ジュータンが敷きつめてあり　瞑想に耽ける人　聖都メッカへ向って礼拝する人々の姿があった．

何度か Istanbul を訪れてかなり隅々まで知っているつもりだが　このモスクを訪れる度に　本堂を取囲む４本のミナレットにくらべて中庭の前面に建つ２本のミナレットが何故に低いのか　不思議に思う．　しかし　このモスク全体を一望する時　ミナレットの位置と高さの違いに全く異和感がないというよりはむしろ　その違いが全体の美しさと重厚さをひときわ強調しているようにみえることから想像すれば　おそらく　このモスクの規模や形やミナレットの数や高さや配置は　マルマラ海に岬のように突出た丘と空の青さを背景に　Istanbul　市街はもちろん　アジア側の Üsküdar からさえもくっきりと見えることを念頭に設計されたのであろう．　このモスクを見つめていると　当時の設計・建築技術の卓抜さとスルタンの権力の強大さと　そしてイスラームへのスルタンの心情とがひしひしと伝わってくる．　このモスクのミナレットについては　伝説めいた話を聞いたことがある．　その話が事実にもとづくものであるならば　このモスクのミナレットが現在の姿で建造されたいきさつは次の通りである．

このモスクを建造する時　当時のスルタンは　担当の大臣に　黄金でミナレットを造るように命じた．　しか

し　その大臣は「黄金」と「6」の発音がよく似ていたため聞き違えて　黄金で造らずに6本のミナレットを造った．　ミナレットが完成して間もなく　イスラームの聖都 Mecca に6本のミナレットがあることに気付きあまりにもおそれ多いことを痛感して　早急に　Mecca に　ミナレットを1本寄進した．　Mecca　の聖堂に7本のミナレットが建っているのは　このようないきさつによる．

モスレム（イスラーム教徒）としての信仰心の厚さを表わすには良い話ではあるが　黄金とは似ても似つかぬ材料でミナレットが建造されてゆくのを　スルタンがただ見守っていたとは思い難い．　Mecca　の聖堂が7本のミナレットで囲まれているか否かは知るよしもないが　このモスクの美しさを見つめていると　この6本のミナレットは最初から設計図に画かれていたと信じたくなる．

4000軒の店があるといわれる大バザール（市場）は多勢の客でごった返している．　市場といっても露天に店が建並んでいるわけではなく　屋根でおおわれた市場 (Covered Bazzar) である．　迷路のような道を歩いている途中　土産品を商う店の男に声をかけられた．　何度もこのバザールを歩いたことのある気楽さで　その男に誘われるままに店に入ってみた．　茶目っ気たっぷりの値引交渉が　英語　アラビア語　そして　おぼつかないトルコ語で進んでゆくうちに　或物の値段は少しづつ下っていった．　してやったりとほくそ笑みながら　「ここには何度も来たことがあるよ」と言うと　店の主はお茶を御馳走してくれた．　だが　結局は　値引きの交渉をしてみただけで　何も買わなかった．　何となくうしろめたい気持を押えてその店を出る折　「また来て下さい」と　声がかかった．　明るい笑顔の店員に代表されるトルコの人達は　絶対に善人にちがいない．

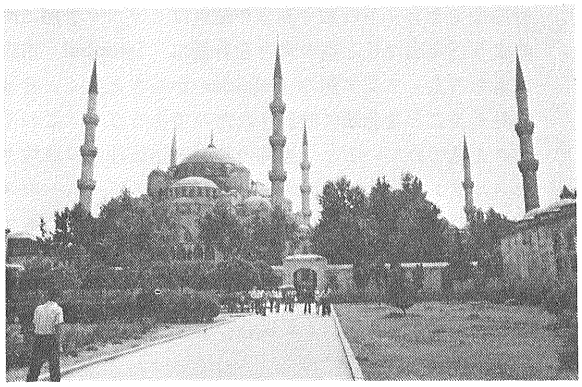


写真11　Sultan Ahmet モスク
Istanbul　というよりはむしろ世界で最も美しい建造物の一つで　中央のドームの内壁が青いタイルで張ってあるので Blue Mosq(青いモスク)とも呼ばれている

ガラタ橋を渡り　海岸沿いの道をホテルへ向った．Üsküdar 行の船が舫う Kabatas 岸壁の近くに建つ Dolmabahçe モスクの黒い影が水面に散っている．　出船の時刻にはまだ間があるのか　客の姿はほとんど見当らない．

紀元前657年にメガラ人によって建設された Istanbul は　当時ビザンテイウム（ビザンテイオン）と呼ばれ　アジアとヨーロッパを結ぶ交通路と黒海から地中海へ向う交通路が交叉する要衝の地である上に気候に恵まれていることもあって　次第に栄えていった．　しかしローマ帝国の進攻の前にあえなく破れ　紀元前3世紀頃には完全にその勢力下に入り　紀元330年になってコンスタンテイヌス皇帝の名に因んでコンスタンテイノープル（コンスタンテイノポリス）と改名された．　それから62年の後にローマ帝国が分裂してからは東ローマ帝国の首都となり　以来　十字軍との戦いをはじめとする度重なる脅威にさらされながらも首都として存在したものの　遂にオスマン帝国に屈して東ローマ帝国は滅亡し　Istanbul と改名された．　長い間にわたってペルシヤ文化とアラブの政治性の影響を受けながら生きてきたトルコは　オスマン帝国の治世に入って　これらを糧として独自の分化を創造・発展させた．　そしてメガラ人の司令官ビザスの名に因んで名付けられたというビザンテイム以降の興亡の歴史を経て　1453年に Istanbul と改名されたこの都は　トルコ共和国の誕生とともに首都という名誉ある地位を失うに至った．

古い家並とメタリックな近代的ビルが奇妙に同居する Istanbul　遠い昔の姿をそのままにとどめる巨大で豪華な建物　やるやかにうねる丘　あくまでも波静かなマルマラ海の水の青さ　旅人の後ろ髪を引くもろもろのものに目をつぶって　今はこの歴史の都 Istanbul に別れを告げるしかない．　せめてエーゲ海に沿って飛んでくれたらと思うものの　満員の飛行機は　かつて訪れたギリシャの方を一瞥する間に　機首をアナトリア高原へ向けた．　ヘレネとパリスの燃え盛る恋や木馬による戦いの伝説で名高い Troy に　詩人ホメロスはどのような想いを寄せていたのだろうか．　その Troy の遺跡もクレオパトラが芝居や踊りを見に訪れたという Ephesus の遺跡も　エーゲ海に金波を散らして沈んでゆく夕陽の中にひっそりと建っているにちがいないが　その光景を見るには余りにも遠すぎる．　アナトリア高原を越える頃　曲りくねった川が見えた．　しかし　この川が　Meander（蛇行）の語源となった　Menderes 川か否かは定かでない．　遠い昔　Tethys 海に浮んでいた弧島 Lut は既に闇の中である．